



緩和ケア新聞

回覧

平成28年9月

飛騨市民病院では緩和ケアチームを平成18年に発足させ、院内の緩和ケア推進のために活動してきました。また、平成19年には緩和ケア外来も開設しました。

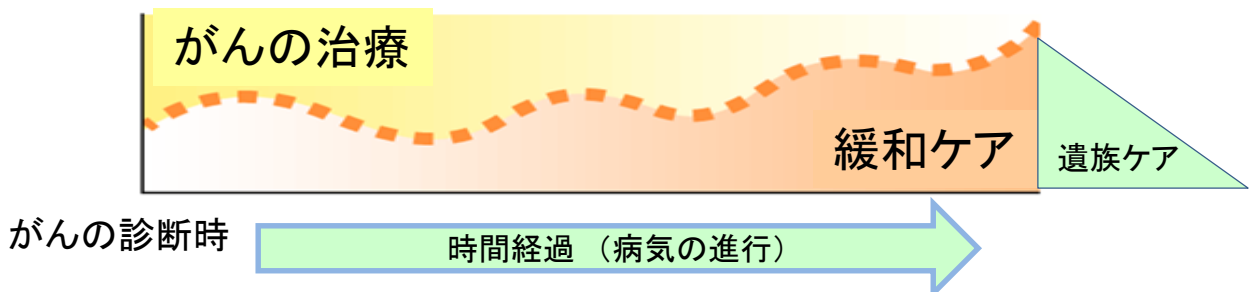
「緩和ケア」ってなあに？

緩和ケアとは、がんなど生命を脅かす病気と診断された時から治療の間、そしてその後の生活の中で生じる身体的な苦痛や気持ちのつらさを少しでも和らげるため、それぞれの患者さんとご家族が“その人らしく”過ごせるように支援させていただくことです。

「緩和ケア」はがんと診断されたときから始めます。

体や心などのつらさが大きいと、体力を消耗することにより、がんの治療を続けることが難しくなります。そのため、がんと診断されたときから、「つらさをやわらげる＝緩和ケア」を始める事が大切です。

また、早い段階から緩和ケアを受けた場合、生活の質(Quality of Life=QOL)が改善され、予後にも良い影響があるという調査報告もあります。



＜緩和ケア外来＞

毎週火曜日
診療時間15:00～17:00
受付時間16:30まで
問い合わせ先：
TEL. 0578-82-1150(代)

＜主な相談内容＞

- ★ 痛み、だるさ、息苦しさなどの変調について
- ★ 病気になったことで起きる様々な心配ごと
- ★ 病気のことを知る怖さや不安について
- ★ 在宅療養の支援について
- ★ 家族が持っている悩みについて 等

本当は 怖くない 医療用麻薬(オピオイド)

～前編～

皆さんは麻薬と聞くとどんなイメージをお持ちになりますか？毎年のように有名人が麻薬・覚醒剤の使用で逮捕され、その害について詳しく報道されます。そのためいざ自分に医療用麻薬(オピオイドと言います)が処方されると麻薬中毒のイメージからオピオイドを敬遠され、痛みを我慢して過ごされる方も少なくありません。

しかし、そういった巷で言われる麻薬・覚醒剤とオピオイドは同じ物ではありません。がんの痛みに対してとても有効な薬です。

そこで今号と次号を使わせていただき、オピオイドの真実についてQ&A形式で前後編として説明させていただきます。



Q. 中毒になってしまうのではないかな？

A. 中毒という言葉自体が人によって様々な捉え方をされる言葉のようですが、多くは「頭がおかしくなる」「廃人になってしまう」「やめたくてもやめられなくなる」という心配のようです。

痛みに対して適切に使っている限りは、頭がおかしくなったり、廃人になったりする心配はありません。

また、精神的な依存を来たしてやめられなくなるようなこともありません。ただ、不適切な使い方(痛みがないのに使用する、注射剤などを不定期に使用する)をすると依存を来たすことがありますので、医師の処方通りの使用を守る必要はあります。

Q. 早く使い出すと効かなくなってしまう？

A. これも事実無根です。

オピオイドの一番の利点は有効限界がない(効かなくなったりしない)ことです。

症状が強くなって徐々に量を増やすことがあります。あくまで痛みの方が強くなっているため、薬が効かなくなっているからではないとご理解ください。

【旭川医科大学病院 緩和ケア診療部 資料より一部改変】

発行 飛騨市民病院 緩和ケアチーム